回　想（※1）

中第三十一回卒　木　村　　猛（※2）

（一）　クラス騒動

昭和六年、私の中学四年学年末に、平素、信頼しておった今野侃（※3）先生が、クラス全員に職員内の不調和、一部の先生への不信感を、扇動的と思われる談話で発表した。

私共は、その真相も分からず困惑し、運動場に集合し対応につき話し合ったが、今野先生を理解する人は少なく大部分は慎重であり私と外二人が、その取扱を委された。相談の上第一回卒志賀清身（※4）氏、第七回卒立谷武助（※5）氏、両先輩に面接し、善処方を要望した処、両人から心配せず軽挙妄動するなと諭されて別れた。一時は五年生や学校当局にも心配をかけたが、大事とならず落着安堵して、集合社会では、その責任遂行と私利私欲の抑制とが大切であると痛感した騒ぎであった。

（二）　戦前の京浜学生馬城会

京浜地方では、大正時代にも相馬学生会があったようだが、昭和十年代には大学進学者が多く、又、当時の明治卒先輩には名声高く活躍中の方が多かった。

学生有志が、（第二十九回卒の故伏見恭平（※6）代表）先輩の激励もあり、学生の向上、母校や先輩との連携のため、京浜学生馬城会を結成し、昭和十一年十一月の設立総会には、母校浅水（※7）校長、在京有力先輩、在京学生等多数出席して、第一回卒折笠晴秀（※8）大先輩を、特に学生会新会長に決定した。その時の歓声快哉と会場の懇親談論風発の盛況が思い起こされる。

一方、東京馬城会は昭和二十一年十一月の総会にて、今後の活躍発展のため、京浜馬城会と改名し、第二回卒渡邉扶（※9）大先輩を新会長に決めて、京浜学生馬城会を統一し、学生先輩渾然連携の方向が定められた。

学生は慶び、日支事変下にあり、同志達が早々に後輩激励の母校訪問をやるなど、一層意気軒昂であり、その後、学生先輩の親交や先輩邸宅での乾杯歓興の機会などを楽しんだが、戦時体制の進行と共に減少していった。

京浜馬城会は、母校との接触の不振中断を終戦と共に改善し、内部の人事組織の改革や総会への配慮など、昭和四十年頃から一層活発になった様に思う。

然し、学生会は、漸く昭和五十二年四月に初めて少数八名の参加の下で、情報懇談激励と共に馬陵会と改称し、その後数回、親睦連絡の機会もあったが社会様相の変化と経済不況の中で会員も減少し、再生の気迫も熟せず解散の形となり元気な元会員は学生会を懐旧し、京浜馬城会発展に協力している。

今後、高校卒、女性の方の出席参加と、新時代の質朴民主的学生会の育成を所望したい。

最後に現在、不幸な形となったが四十年前京浜学生馬城会設立に、懸命努力された故伏見恭平氏を追憶し感謝を捧げご冥福を祈る。

（三）　思い出の先生の中の

石川虎之助（※10）先生

和服姿白髭口髭の古武士風格で、長文著名の詩文を独特の節調で暗んずる魅惑なる風貌は、私に漢詩と詩吟の良さを教えてくれた。

農作業と共に教員検定への不屈な独学力行老いて、若人と英数学共学など広範な修行の精力的向学心に、時代を越えた大きな叱咤と激励とを、強く感得させられた。

先生作詩の相馬健児歌を知ったが、相馬野馬追、相馬藩徳を賛美し、当時の非常時不安の時世を慨嘆して、相馬健児の大奮起を呼号しているものと思う。

左記に書いた漢詩の一節を吟詠して、先生のご冥福を祈念したいと思う。

相馬　健児歌　　石川虎之助賦

奥州夙ニ著ル相馬ノ武
錦袍鐵馬燦タル玄弓
敬レ神ヲ憂レ世ヲ藩祖ノ徳
皇風既ニ識ル靡ニ北東ヲ
尚隆ニ風教ヲ育ニ人物ヲ
俊良輩出シ健児叢ル
君不レ見皇祖東征復シテ中国ヲ
亦不レ見楠公唱レ義ヲ亂臣空シキヲ
成敗ハ時、知ルヲ一身在リテ得失ヲ
自ズルヲ是英雄
即今天下果シテ何ソ状
殺シテ身ヲ成スハ仁ヲ存ス此ノ中ニ
青年須ラク瀝ギ満腔ノ血ヲ
回シテ憶ヒ祖風ヲ激ス我ガ衷ヲ

相馬　健児の歌　　石川虎之助賦

奥州夙に著る　相馬の武
錦袍　鐵馬　燃たる玄弓
神を敬ひ　世を憂ふ　藩祖の徳
尚　風教を隆にし　人物を育す
俊　良　輩出し　健児　叢る
即今　天下　果　何　状ぞ
身を殺して　仁を成すは此の中に存す
青年　須らく満腔の血を瀝ぐべし
祖風を回憶して　我が衷を激す

（※1）「相中相高百年史」　思い出の記より
一九九八（平成十）年七月六日発行

（※2）旧姓　武沢、　昭和八（一九三三）年卒。
中村出身。一橋商大。

（※3）相中第四回、明治三九（一九〇六）年卒。中村出身。陸士。
相中教諭　大正十（一九二一）年～昭和六（一九三一）年。

（※4）明治三十六（一九〇三）年卒。日立木出身。陸士。

（※5）明治四十二（一九〇九）年卒。鹿島出身。

（※6）昭和六（一九三一）年卒。日立木出身。東大（法）。

（※7）浅水成吉郎。昭和九年～十二年、校長。

（※8）明治三十六（一九〇三）年卒。福浦出身。東大（医）。
かわら版二百十二号に、二〇一三年「馬城会報」より、
第一回生総代並びに答辞の記事を転載。

（※9）明治三十七（一九〇四）年卒。浪江出身。東大（工）。

（※10）相中教諭　大正十一（一九二二）年～昭和七（一九三二）年。
馬城かわら版二〇四号「母校にまつわる思い出」、
二二六号「母校の三大師恩」、
二二七号「母校の学恩に謝す」に記述あり。

（転記&※脚注　村山）